

までいな針仕事で希望をつむいだ日々



代表の佐野ハツノさん
(前田・八和木)

避難直後の松川第一応急仮設住宅で、お年寄りの生きがいをと始めた「いいたてカーネーションの会」。新聞報道などをきっかけに、全国から寄せられた着物の古着を使い、「まで衣着」の他、半天やバッグ、小物などをつくり続けています。支援者の助言を受けて作品を販売するようになりましたが、「ものを売る」素人にとって、そこからは勉強の連続でした。自分の手仕事がお金の少しでも収入となったとお年寄りたちが喜んでくれた時は、本当にうれしかったです。現在は、他の仮設住宅や借り上げ住宅の人と一緒に、商品づくりに励んでいます。商品は羽田空港の売店に置かれている他、デパートのイベントなどで販売されることもあります。

村に戻っても続けていきたいと夢を描いています。この縫い物が、絆を持って生きる人たちの支えになれば、本当にうれしい。そうやって前を向いて歩いていく姿で、いただいてきた支援に、少しずつでも応えていけたらと思うのです。



いいたてカーネーションの会

着物をリメイクして
つくる「まで衣着」

振り返ります
つむぐこと



表情豊かなウサギたち。後ろの飾り棚は、和子さんが設計し、ご主人の憲昭さんが製作したもの

避難の後、平成24年に定年退職をしたのですが、村でしようと思っていたことはできなくなってしまって、さて何をしたらいいんだらうと始めてみたのが、布製の手提げバッグづくりでした。一通り習うと、自分の発想でデッサンしてつくるのが楽しくなり、その後はアンティークの着物地を買ってきて、つるし雛やウサギの人形づくりにもはまりました。人形は、形見の着物で作ってほしいと頼まれたりもして、すごくたくさん作ってきました。村での暮らしとは違って、狭い空間で避難生活を送っていると、ささいなことでもトラブルになるものですが、手仕事に集中する時間があつたおかげで切り替えができて、日常の暮らしをまた頑張ってきたのだと思います。家族も応援してくれたのが励みになりました。

村の文化祭で見ると手仕事の品々は、本当に素晴らしいものが多いです。避難後、それまでの仕事ができなくなって、その分の時間や力が手仕事に注がれて、みるみる向上していく村の女性たちの発想力や吸収力はすごいなあと感じてきました。何年かして振り返った時に、大変だったけれど悪いことばかりじゃなかったと、作品たちが語りかけてくれるかもしれませんね。

瀧本和子さん
(前田・八和木)



心に余裕を取り戻す 手仕事の時間

パン粘土の花。花しべの表現にもこだわります

がってきました。避難生活の中、さまざまな場所でも、心のよりどころとなり、人々をつないできた手仕事のことを、避難指示解除という転換期を控えた現在の思いと合わせて、4人の方に聞きました。

家族や隣人と離ればなれに避難せざるを得なかった、あの混乱と苦悩の中で、懸命に「暮らし」をつむぎ、支え合おうとした女性たちの足跡も見えてきます。までいで美しい作品の数々は、その思いを映す鏡のようでもあります。

そしてそれは、6年に及ぼうとする避難の日々にも「暮らし」があつた確かな証。一つひとつが、までいな手仕事の物語です。

離ればなれでも共に歩んでいたかった



佐々木千栄子さん
(佐須)

村で開いていた農家レストラン「氣まぐれ茶屋ちえこ」をかつて訪れたという神奈川県相模原市の方から、震災後、「何かお手伝いできることはありませんか」と連絡をいただきました。その時はお気持ちにお礼を言って、話を終えたのですが、その後、借り上げ住宅の皆さんが、孤立した状況の中で、病気になりそうようすを見て、「できれば手仕事に使える古い着物などをお願いしたい」と、改めて申し出たのです。そして送っていただいた古着や布地を、皆さんに取りに来てもらいました。古着の中には打ち掛けやウェディングドレスまでもありました。それぞれの仕事に精を出してきた村の女性たちに、持て余す時間を有効に使って、

力を取り戻してほしいという一心でした。集まって手仕事をする時間も大事にしました。ドイツ大使のご家族が、帰国に合わせて、私たちが作った小物をクリスマスのマーケットで販売して下さったこともあります。

支援をいただいた相模原市の皆さんには、5年が経ち、「自立を始めます」と、これまでの感謝を伝えました。これからは、村の中で、集まれる場所が必要になる。村内の家ができあがったら、村の人が集まってわいわいと1日を過ごせる場所を、また作ってみたいと思っているんです。

ミニチュアの着物は和のインテリア

届いた生地や古着を多くの人で分け合い手仕事の時間に生かしてきました

新しい年の
事始めによせて

相馬大野台応急仮設住宅に入居する女性たちでつくる「羊の会」は、羊毛フェルトのルームシューズや、マフラー、エコたわしなどを製作するグループ。平成24年に、それらの製法を講習した笹久保孝子さん(神奈川県在住)が一般社団法人「あむえこねっと」を立ち上げ、材料の手配や製品の販売を支援くださっています。平成28年6月には、エコたわしを販売して下さる西新井大(東京都)の縁日を、会のメンバーで訪問し、感謝を伝えることができました。また9月には、仙台市の三越デパートで、ルームシューズの販売会を開かせていただくなど、いろいろな経験も、皆で一緒にしてきました。

注文生産のルームシューズ

仮設住宅の集会所が羊の会の工房



「羊の会」の手渡由美子さん(前田・八和木/左奥)に話を聞きました。右手前が一般社団法人あむえこねっと代表で、編み物講師の笹久保さん

週に1度、集会所に集まり、「これでどうかなあ」とにぎやかに相談しながらのものづくり。終わったらお茶を飲んで、仲良くやってきました。仮設住宅を離れた後は集まるのが難しくなるので、現在受注しているものを作り上げたところで、だんだんと活動は休止に向かう予定です。仕方のないことなのですが、ばらばらになるのが今はとてもさびしいですね。

仲良くにぎやかに 集会所でのものづくり

新年の商いは、初売り・初荷で始まりです。また、農作業や山仕事には豊作や安全を祈願する新年の行事があります。書道の書き初めや、茶道の初釜など稽古始めもありますね。そんな事始めになぞらえて、村の女性たちの手仕事を紹介しようとして取材をしたところ、避難生活を乗り越えるための試みや支え合いとしての手仕事の存在が、エピソードの中に浮かび上

わたしたちの避難と「てしごと」のはなし